現代イラクにおける政治変動とシーア派イスラーム政党に関する研究

――シーア派宗教界とダアワ党を中心として――

平成 17 年度入学
派遣国：シリア，レバノン
山尾　大

キーワード：現代イラク，イスラーム政党，シーア派宗教界，ダアワ党，サドル派

対象とする問題の概要

イスラーム政党とシーア派宗教界は，現代の中東，とりわけ 2003 年のイラク戦争後のイラクにおいて，大きな政治的影響力を持っている。イラクにはシーア派宗教界の中核地のひとつが存在する。シーア派宗教界の頂点に君臨するウラマーの最高権威は，フムスと呼ばれる宗教税を，自らの代理人を各地に派遣することで徴収し，大衆と密接に結び付いている。一方で，イスラーム政党と直接的あるいは間接的に連携することで，政治的発言力を拡大している。このように，現代イラクの政治変動において，イスラーム政党とシーア派宗教界は相互に連携しながら社会と政治，あるいは中央政権に様々な働きかけを行なってきた。本研究においては，以上のようなシーア派宗教界とイスラーム政党の関係に着目して，イラク政治を分析する。

研究目的

本研究の目的は，イスラーム政党，なかでもダアワ党の理念と活動実態の把握を通して，現代イラクの政治変動を分析することである。ダアワ党は 1957 年に創設されたイラク最大のイスラーム政党である。これまでのイラク政治の研究対象は，ナショナリズムの分析視角に基づいて，長らく政権党であったバアス党，フセイン政権に偏っていた。しかし，イスラーム政党は，イラク政治の動態に様々な側面から影響を与えており，その研究は緊要の課題と認識されている。そこで，ダアワ党の主たる支持基盤であるシーア派宗教界にかんして，その社会的・政治的影響力の構造を明らかにし，さらに同党とシーア派宗教界の関係に焦点を当てる。これにより，イラクにおける政治とイスラームの動態を明らかにすることを目指す。

フィールドワークから得られた知見について

本派遣による現地調査においては，主として以下の 5 点の成果を達成できた。

第 1 に，シリアにおけるサドル派の幹部との交流をより深めることができたこと。サドル派とは，ダアワ党の創始者のひとりであり，重要なイスラーム思想家の M.B.サドルにはじまり，親戚の M.S.サドル，現在イラクで活動中のムクタダー・サドルに至る思想と政治活動の系譜である。同派は，本国のイラクに加えてシリアでの活動にも力を入れている。前回の調査で構築した関係を，今回の調査において強化・発展させ，活動実態に関してインタビューを行なった。

サドル派のシリアにおける最高幹部

第 2 に，レバノン，シリアにおけるスィースターニー（現在のイラクのシーア派最高権威）の代理人に対してインタビューを行い，同師のイラク問題に対する姿勢を把握した。なお，この問題に関する資料の提供も受けた。

スィースターニー師の代理人（レバノン）; ハーミド・ハッファーフ氏

第 3 に，M.B.サドル以降のイラク・シーア派の政治思想を把握する準備が整ったことである。すなわち，シーラーズィー，ムダッリスィーをはじめとするイラクの法学権威の事務所を訪問・聞き取り調査を行なうことで，サドル後の政治思想がいかなる布置図にあるかを把握する資料を獲得するとともに，今後の訳出と思想解析の準備を行なうことができた。

第 4 に，ダアワ党の内部文書を入手したことである。この資料は，ダアワ党の幹部に配布されたもので，極めて貴重な内部文書である。これに関しては，昨年末に「京都大学イスラーム地域研究センター」で研究報告をされたイラク人研究者 F.A.ジャッバール先生のご尽力によった。本資料の解析を通して，ダアワ党の史的展開が明らかになると思われる。

第 5 に，シリアにおけるイラク人難民の調査を通して，彼らの生活とシリア社会の関係の一側面

が明らかになったことである。昨年度から急激に増加したイラク人難民が抱える住宅問題や，彼らの流入によって生じる物価の上昇, スンナ派とシーア派難民の住み分け状況などが明らかになった。これは，指導教員である小杉先生による臨地教育の一環として行なった。

臨地教育中の小杉教授と報告者

今後の展開･反省点

今後の研究の展開に関しては，第 1 に，サドル派，ダアワ党関係者，シーア派宗教界の法学権威の事務所などにおいて構築したネットワークを, さらに拡大･発展させせることである。それにより，必要かつ重要な情報を聞き取り調査し, より内部の重要な幹部への面会が可能になると考えられる。第 2 に，今回収集した書籍，党内部文書などの解析を進めることで，ファクト・ファインディングを重ね，次回の調査を円滑に行なう準備を進めることである。

反省点としては，聞き取り調査の準備が不十分であったために，やや一貫性に欠ける質問を繰り返した感が否めないことである。次回の調査においては，質問状を作成するなどして，効率的な聞き取り調査を行ないたい。